

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	原 口 水 葉
論文審査担当者 主 査 内科学 別 役 智 子 外科学 浅 村 尚 生 衛生学公衆衛生学 武 林 亨 臨床検査医学 村 田 満 学力確認担当者：河上 裕 審査委員長：浅村 尚生 試問日：平成28年 8月24日				
(論文審査の要旨) 論文題名：Determinants of chronic obstructive pulmonary disease severity in the late-elderly differ from those in younger patients (後期高齢者におけるCOPD重症度評価の特徴) 本研究では、高齢者における慢性閉塞性肺疾患（COPD）の重症度評価について検討した。COPDの重症度評価は近年、気流閉塞に加え症状や急性増悪といった多面的評価が重要視されている。本研究ではさらに年齢の要素を加味すること、特に75歳以上の高齢者において気腫化や肺高血圧、生活の質や在宅酸素導入の有無を考慮して重症度を判断することの重要性が示された。 審査では、まず地域差について質問された。443例中250例程度が慶應大学病院、200例程度が他施設からの症例だが、予備解析で結果に差は認めなかったと回答された。また、肺機能検査、心臓超音波検査方法の標準化について質問され、肺機能は米国胸部学会に記載の方法を、心臓超音波検査も標準的方法を用いて算出されたと回答された。 次に患者背景において、現喫煙者割合が異なることによる影響について質問された。若年群が年月を経て高齢群と同様の経過を辿るのか、全く異なる群を見ており将来の臨床像も異なるのかという点は、横断的研究である本研究からは不明だった。しかし今後本研究を元に経時的な変化の検討が期待できると回答された。 さらに肺気腫と気流閉塞の関係が若年群と高齢群で異なる点が大変興味深いと指摘された。ただし「傾きの相違」として表現し、共分散分析ではなく交互作用解析で検定すべきと指摘された。また高齢群で肺気腫と気流閉塞の傾きが緩やかである理由が質問され、気流閉塞がなくても一定数は肺気腫がある先行研究や、生存バイアスが関与している可能性が回答された。本研究に参加拒否した症例の影響も検討ができるとより良いと指摘された。 また重症度に気流閉塞の関与が乏しいとなった場合、そもそもCOPDとはどのような疾患と捉えれば良いのか、という疑問が呈された。共通認識としての定義は気流閉塞で規定するしかなく、気流閉塞も大変重要な病態の一つであるが、それだけではなく炎症性の全身性疾患として捉えることが必要と考えられる。予後判断指標としてBODE index(体格、気流閉塞、症状、運動耐用能を利用して算出)が有用といった先行研究が提示され、本研究ではさらに年齢による相違がある項目を深く考察したと回答された。 最後に、本研究がどのように臨床的に生かされるかと質問された。気流閉塞が比較的軽くても「重症」と判断されるべき症例が、特に高齢群において多いことに留意して診療にあたることで、真に必要な治療介入が成されると回答された。 以上、本研究には今後さらに検討を続けるべき課題が残されているものの、益々進むであろう世界的な高齢化社会において、高齢者におけるCOPD重症度評価の新たな可能性を示した点で、非常に有意義な研究であると評価された。				